

ケイ・タケイの作風について

— 作品批評文にみる 「ライト(Light)」の特性 — 細川 江利子

1. 研究目的及び方法

ケイ・タケイは、小さい頃よりクラシックバレエやモダンダンス、演技や発声のトレーニングを受けた後、15歳より、檜健次のもとで本格的にモダンダンスを始めた。そして、1967年、フルブライト留学生としてニューヨークに渡り、ジュリアード音楽院他さまざまなスクールでレッスンを受け、アン・ハルプリンらとの出会いを経た後、1969年「ケイ・タケイとムービング・アース」を結成。レパートリーは、同年のパート1から現在27に至る「ライト」シリーズが中心となっており、現代アメリカのダンス界 — 特にポストモダンダンス、アバンギャルドの中で、その一角を占めている。

本研究は、このケイ・タケイの作風を明かにする第一段階として、「ライト」をとり上げ、作品批評文（Dance Magazine 1972～1988、及び1979、1985の来日時批評文他）を手がかりに作風の概要を捉えようとするものである。

2. 結果及び考察

（引用批評文については発表資料を参照）

(1) 人生という「旅」を続ける、苦しみを負った人間達

「ライト」は、人生の「旅」、或は人類の歴史という「旅」であり、しかもその「旅」は、苦闘や困難に満ちたものであると評されている。

「タケイによれば、人生は厳しく、困難である。…パート5は、苦悩と疲労のタペストリーである。」

「旅、苦闘、身体異常、重荷について語る。」

「最初は、人間の運命の恐ろしい、絶望的な光景を伝えているかのように見える。しかし、これは究極的には、……人間は行くべき道に沿って進み続けるのだということを示す希望に溢れている。」

実際、「ライト」には、「旅」を象徴するかのよう、荷を背負って歩く人達（ほとんどのパート）、不具の振付家（パート7）、盲にされ石を投げつけられ、それでもなお石を打ち続ける人（パート10）、こわされても、こわされても石の道を作り続ける人（パート12）等が現われてくる。

これについて、タケイ自身は、特に苦闘や困難そのものを強調するつもりはなく、「自然のサイクルとは、生まれ一働き一死ぬ、その繰り返しであると思う。私は、人間が働く姿を、働く美しさ

のある人間を見たい」のだと言う。

タケイは、様々な困難や苦を課すことで、より極限的狀況下で働く人間を見ようとしているのかも知れない。

このタケイの「働く人間」のイメージは、自然のサイクルをつくりだす「畑」へ、つまり農民へと結び付いていく。それはパート7以降にしばしばつけられている副題を見ると明かである（パート7：畑の日記、パート10～13：石の畑、パート14：松ぼっくり畑、パート16：大根ひとり踊り等）。そして、特にパート7に代表されるが、「ライト」には物語性を認めることができる。

(2) 動き — 具体的行為の反復

荷を背負い、歩く。

倒れては、起きて立ち上がる。（パート5）

けいれんし、のたうちまわり、狂ったように笑う。

（パート8）

白い布を丸めて、穴に投げ込む。（パート9）

石を打ちつける、並べる。（パート10～13）

歌に合わせて、「サ！」と相の手を入れながら、円になって踊る。（パート12）

この他、しゃがむ、ころがる、跳ぶ、はう、たたくといった日常的な、しかも或る具体性を持った行為が、「ライト」の動きであり、そこには遊戯性を見ることができる。「いわゆるダンス・テクニックは全く興味ないことです」と、彼女自身言い切るように、既成のテクニックは使われていない。「大抵、シンプルで、彼女らしくどこか原始的」である。また、身体をたたき、石を打ち鳴らす等の音のリズムと共に、動き自身のリズムについても言及されている。

そして、動きは「反復」され、Baker、合田が言うように、「堆積（accumulation）」されていく。一つ、或はいくつかの動きを一単位として、淡々と、無表情に繰り返され、ゆるやかに変化していく。

「（ダンサー達は）無表情に…、人形のように、ステージ上で、或決まった型に沿って動く」

「淡々とした繰り返し」

「大抵、ゆっくりとたれこめ、陰鬱である。エネルギーは内側に向かい、冬眠の長い夜の間中、輝いている。」

しかし、時に、「自暴自棄（desperate）」としばしば評される、激しい運動衝動を伴った動きの「反復」が観る者に強いインパクトを与え、「恐怖（terror）」の感情さえ起こさせる事がある。Siegelは、「暴力的（violence）とさえ言える『極端さ（extremity）』』」と言い、のたうちまわり、ころがり、肘から出血するほど激烈に床に飛び込む動きを繰り返す、パート8の男性ソロを例にあげ、「あまりに痛々しい（painful）」と言う。kendallは、「自殺狂に陥った」ようだといい、パート3ではしごに勢いよくぶつかっていく、目隠しされ

た女を例にあげ、「残忍性 (cruelty)」という言葉であらわしている。また、Bakerは、同じくパート8のタケイのソロについて、布を次々に身体に巻き付け、グロテスクに笑いながら、跳び回るタケイを、「ぞっとするような苦痛 (pain) の原型」だと言う。Siegel, Baker共に、こうした恐ろしいまでの痛々しさを感じさせる作品は、アメリカには少ないとしている。また、Siegelは、この激しい衝動的動きが、ただの平板な演劇的舞踊に陥ることを避けていると見ている。

市川は、タケイのインタビューでの答を引き、こう言う。「彼女は…戦争映画が好きであると語っている。戦争は死の恐怖に曝されていて、そこでしか人間は自身の感情や肉体に忠実になることはできないというのだ。知性は放棄され、おろおろしたり、叫んだり、人間が肉体をたずさえて本質を露呈するのはこの時しかない。“苦しいことは美しい”と彼女は語る。」(そして、タケイの作品の特徴をパセティックなことだとした上で)「彼女の戦争映画についての挿話にしてもパセティックな瞬間があり、その瞬間には人間は知的なレベルを超え、肉体の危機的な部分を開示し、生み落とす。」つまり、タケイは、「さまざまな危機に対処するダンサーのあり様にひどく関心を持っているようである。」と述べる。また、Eganも同様のことを指摘し、真の自分を見せる瞬間を「真理 (truth) の瞬間」と呼び、これは遊んでいる時の子供、或は動植物といった自然界には容易に見られるものだ、と、タケイが主張すると言う。上記の衝動的動きの反復を繰り返す動きの他、遊戯性のある動き、投げつけられた石に反射する動き等は、こうした知性を越えた「真理の瞬間」を生もうとしているのだといえる。

(3)対比的な空間構成 (個一群 / 限定されるスペース) と、時間の展開

Bakerがパート1から5について、「(パート5を除く)各パートのすべては、我々にいくつかの人間のグループ (異なる活動に熱中する、しばしば『群』とソリスト) を対比させる」と言うように、個と群の対比が構成上の大きな特徴である。この対比される個と群は、それぞれが動くスペースを限定しており、時には、石、パズル、照明により、スペースを完全に区分する。Sommersは、「タケイのマス、密度、群の動きについての知識、及び環境と人間との関係、そして人間同士の関係についての探究が、彼女に労働者 / ダンサー達によって発展しつつある一つの社会 (community) を案出させた」と言っている。社会との関わりの中で、人間の姿はより際立ったものとなる。

パート4 : ジグソーパズルを並べていく女 (人々の行く道を妨げる者)

↓
パズルにより行き場を失う者達 (妨げられた者達)

パート9 : ステージをスクエアにゆっくり回る女

↓
穴の中にボール (白い布) を投げ込む女

↓
「隊列をなし、規制されたステップによって几帳面に移動するダンサー群」
合田は、「内在する時間」と「雑多なものが混在し、錯綜する現実時間」が巧みに複合されていると言う。

この「対比」は、一つのパート内で並列的にあらわれる時もあるれば、一つのパートのシーンの間で、或は連続するパート間であらわれる時もある。

パート4 : パズルを並べ、敷いて行く。

↓
パート5 : 敷かれたパズルの上で踊る。

↓
パート6 : パズルをはずしながら踊る。

また、このような空間構成と共に、合田、Hodgsonが指摘するように、「ライト」では、時間の経過を重視している。組み立てられていくパズル、並べられていく石の道、背負った袋からこぼれていく米は、空間上に時間の経過を具体的痕跡として示す。また、断続的な暗転や動作の休止、個と群の間での動きの対比 (特にスピード) 等が効果的に用いられている。

そして、「ライト」は、パート毎の関連はないが、連続して上演されることにより、さらに効果的となり、まさしく「旅」となる。

(4)衣裳、小道具、装置 — 自然に存在するもの

オフ・ホワイトの木綿のパンツ、上着。背負った大きな袋、石、ステージをおおう白い布。身体から発する音・声。これらはいずれも、自然に存在するものであり、作品に具体性を持ち込んでいる。

(5)隠喩的で、イメージに満ちた世界

— 「ライト」 —

以上のような特性を合わせもつ、全体としての作品「ライト」は、「原始的」「儀式的」「宇宙的」な雰囲気をもつ、隠喩的 (metaphorical) で、イメージに満ちた詩的世界である。

「いずれにしても作品は何も語らず、訴えもしない。そこには、ただ黙々と動く人間像があるだけである。それなのにさまざまなイメージを湧かしてくれる」「叙事詩的作品であるライト」

「『ライト』は、あらゆる人間の魂の投影であると同時に、人間の様々な状況に対するメタモルフォーゼであった。」